

落ちこぼれ

Ochikobore [☆1] Mahoutsukai wa,
Kyo mo Muishiki ni Cheat wo Tsukau....

[☆1]魔法使いは

今日も無意識にチートを使う

6

右 薙 光 介

Presented by Kousuke Unagi

チヨ

レンジュウロウの義理の娘。
ハーブエルフ スカウト
半森人の斥候。

レンジュウロウ

コバルド
狼人の侍。
“斬鉄”の二つ名と呼ばれ、
冒険者の間でも一目置かれる存在。

ミント

ユユの姉。
陽気な性格でパーティの
ムードメーカー。
大剣を軽々と振り回す。

ユユ

物静かな魔法使いの少女。
アストルを慕い、
彼の心の支えになっている。

アストル

最低ランク☆1のアルカナを
授かってしまった少年。
『先天能力』により、
魔法を自在に使いこなす。

リック

冒険者予備学校時代からの
アストルの親友。

エインズ

元貴族という異色の冒険者。
パーティリーダーらしく
気遣いのできる男。

主な登場人物

Characters

竜の島

生活拠点にしている塔のソファで一息ついた俺——☆1のアストルは、沸々と煮えたぎる気持ちを抑えながら、情報の整理を始めた。

——恋人のユユとその姉であるミントが攫^{さら}われた。

今すぐにでも連れ戻しに行きたいところだが、冷静さを欠いてはまた失敗してしまうだろう。

ここは反省も踏まえて一度現状を振り返るべきだ。

エルメリア王国でナーシェリア王女に関連する事件を解決して、ここ学園都市^{ウエルス}に帰ってきた俺達のパーティーは、奇妙な一団とすれ違った。

『ダカー派』と呼ばれる竜信仰の連中である。

その時視線を感じた気がしたが、あの時点ですでに状況は動いていたのかもしれない。

☆1という最低のアルカナを持つ身ながら、学園都市^{ウエルス}で『賢人^{けんじん}』の地位を得た俺を疎^{うと}む者は多い。赤の派閥^{はばつ}に属するマフィア^{まが}紛いの賢人マルポーナもその一人だ。

この世界において、アルカナの☆の多寡^{たか}は人の価値に等しい。奴は“☆1風情^{ふぜい}”の俺が同じ賢人という地位にあるのが面白くなかったのだろう。

そんなマルポーナに『ダカー派』からユユとミントの件で依頼があった。それがきっかけとなっ

て、俺を罠に嵌める計画が組み上がったと考えるのが自然だ。

マルボーナにとっては、一石二鳥の良い案だったに違いない。査問会で俺を足止めしている間に姉妹を攫い、『ダカー派』に引き渡した。俺には、二人を殺したと匂わせる内容の手紙をよこしたが、あれはどちらかというと嫌がらせみたいなものだったのだろう。

それで俺は、怒りと勢いに任せて、マルボーナの塔へ向かった。姉妹を殺されたと思ったから。

そして、マルボーナ本人とその塔に属する人間を、肅々と虐殺した。古代魔法も使ったし、『クレアトリ』の杖の宝珠に宿した人工神聖存在——ミスラも呼んで、徹底的にやった。

アレは紛れもない虐殺だ。誰にも慈悲をかけなかったし、人間として見なかった。

しかし、そこで姉妹が生きていることがわかったのは不幸中の幸いだったと思う。

すでに連れ去られていなかった後だったが、マルボーナの頭の記憶を直接ひつかきまわして、依頼主が『ダカー派』であると突き止められた。

今俺にできるのは、彼らを追う準備と……『ダカー派』の追跡に出たパーティメンバーのチヨが戻るのを待つことだけだ。

東方の『忍者』の技を使う優秀な斥候であるチヨが戻ってきたのは、日が傾いてあたりが薄暗くなりはじめた頃だった。

「遅くなりました。申し訳ありません」

彼女の姿を見るなり、俺は待ちきれずに問いかける。

「二人は……!?」

「姿は確認できませんでした。しかし、学園都市の南……街道を少し進んだところで例の『ダカー派』の集団を捕捉しました。あちらも手練れの斥候を放っていてなかなか近づけませんでした、あの移動速度であれば、今からでも充分に追いつけます」

姉妹の行き先を見失っていないとわかり、少し胸を撫で下ろす。

何も解決してはいないとはいえ、完全に行方が掴めないなんてことにならなくて良かった。

「チヨ。戻ってきたばかりで悪いが、案内を頼む」

狼人族の侍で、チヨの義理の父であるレンジュウロウが早速刀を手に立ち上がる。

「はっ。お任せくださいませ」

「ちょっと待って、チヨさん。はい、これ、アストル君考案の疲労回復茶とクッキー。一息だけでもおつきなさいな」

レンジュウロウに続き、今まさに扉を出ようとするチヨを、穏やかな女性の声が呼び止めた。彼女——パメラは、俺達パーティのリーダーであるエインズの奥さんだ。

「もう、レンジュウロウさん。女の子を気遣うことを少しは覚えてくださいね」

「むう……。すまぬな、チヨ」

「いいえ、チヨに気遣いは不要ですよ、お父様。では、今のうちにルートの確認を」

チヨはクッキーを齧りながら地図を取り出し、机に広げる。

「このルートです。『におい玉』を馬車に放っておいたので、追跡用の蟲で正確に後を追えます。」

馬車は三台、全て二頭立て。周囲に警戒用の斥候が二人と、護衛用と思しき武装者が五人。一団の正確な人数と、どの馬車にお二人がいるのかは確認できませんでした」

追跡者としては完璧な仕事だ。

「ふむ……このルートだと、行き先は南沿岸部にある港町、ポートアルムじやの。『ダカー派』の本拠地であるダマヴンド島へ戻るつもりかもしれないな」

ダマヴンド島は、『西の国』の南に位置する大きな島である。

一応、『西の国』の一部とされているが、その実態は『ダカー派』が支配する一つの国のようなものであり、閉鎖的で他地域との政治的な関わりをほとんど持たない。文献によると、昔は『西の国』と敵対関係にあったらしい。

「馬を使えば、最初の宿場町で追いつけると思われます」

「彼らと交渉はできそうですか？」

俺の質問に、チヨは首を捻る。

「理由はわかりませんが、かなり警戒している様子でした。マルボーナは“売値が付いたから攫った”と言っておりまして、『ダカー派』は最初からお二人を狙っていた可能性があります」

二人を攫ってきたら金を払うと依頼したというなら、それがどういう理由であれ、友好的とは言えない。姉妹に何か用事があるだけなら、俺の塔を訪れて用向きを説明すればいい。それをギャングに依頼して金で解決して連れ去るなど、後ろ暗い事情があるとしたか考えられない。

つまり、奴らは“敵”と看做していいだろう。

「しかしよ、竜信仰なんて言いながら陸竜の手綱をマルボーナに渡しちまうなんて、信者が聞いて呆れる」

俺の冒険者予備学校時代からの親友であるリックが、装備の点検をしながらぼやいた。

「それに関してなんだが、今回の件で確信したことがある」

おそらく、『ダカー派』の連中が奉じているのは“神格化した特定のドラゴン”だ。それ以外のドラゴンは敵か道具程度にしか考えていないのだろう。そうでもなければ、マルボーナに支払いの一部として陸竜を操る魔法道具を渡したりはしないはずだ。

つまり、俺達が対峙した陸竜は単純に戦力の一つとして使役されているだけであり、信仰の対象などではないと考えられる。

『ダカー派』にとつては“竜と名のつくデカイトカゲ”程度の認識に違いはない。

「ふむ。なればアストルよ、その特定のドラゴンとやらにはアタリがついておるのか？」

レンジュウロウに質問された俺は、以前読んだ文献の記憶を掘り出しながら答える。

「資料が少なすぎて正しいかはわからないんですけど……『終末』関連の古文書に『アズィ・ダカー』という邪竜の記述がありました。またの名を“終末の蛇伯”。強大な力を持った竜で、かつてこの一帯はその竜の支配地だったらしいです」

かなり曖昧な記述であった上に、俺が見た古文書自体も複製されたもので、真贋は不明だが……正解からそう遠くないと直感している。

黙って話を聞いていたエインズがため息と共に呟く。

「どっちにしろ、二人が攫われた理由はわかんねえってことか」

「ああ。そして、どっちにしろ返してもらおう」

「お待たせいたしました。出立いたしましたよう」

お茶でクッキーを流し込んだチヨが、準備しておいた旅荷物を背負う。

俺達もすでに準備は万全だ。旅道具に、武器、薬品、巻物、魔法道具。戦闘になることを想定した――どちらかと言うと“討伐クエスト”に行く時のような装備品である。

相手は人間だが、話を通じない手合いであれば、単に敵であると割り切る。

そう……マルボーナ一味と同じだ。

「まずは馬を借りねばな」

「すでに声掛けをしてございます。南門そばの貸馬屋へ参りましょう」

レンジュウロウに応え、チヨが番号の書かれた木札を差し出した。

一人につき一頭借りてくれたようだ。

「わりい、パメラ。すぐ戻るからよ」

「焦らないでいいわよ。いつも通り、確実、堅実、執拗に、ね？」

「任せろ」

エインズと抱擁し、軽いキスを交わしたパメラが、俺の手を取った。

「アストル君、あなたもよ？ エインズをお願いね？」

「わかっています。留守番をお願いします」

「ええ、一人になっちゃうと少し寂しいわ。早く二人と一緒に戻ってきてね？」

パメラは微笑むが、きつと不安に思っているだろう。

身重の彼女に心配をかけるのは良くない。さっさと終わらせて戻ってこよう。

「ええ、すぐに戻ります。必ず、二人と一緒に」

「オレもいるんだ、あんまり固くなるなよ？ 久々のコンビだ……オレならやれるさ」

リックが俺の肩を軽く叩いて真っ先に扉から出ていく。レンジュウロウとチヨがこれに続き、最後に俺とエインズが部屋を後にした。

パメラを一人にしてしまうことには、良心の呵責を感じるが、戦闘になる可能性が高い以上、エインズにも出てもらわなければ、こちらが危険だ。

「すまない、エインズ」

「ナマ言うんじゃねえ。あの二人だってオレにとっちゃ家族と一緒にだ。……おめえもだぞ？ アストル。一人だけで背負うな。危機つてのは家族全員で乗り越えるもんだ」

ニヤリと口角を上げるエインズ。レンジュウロウも頷いて同意を示す。

「然り。お主、前に言っておったではないか。“塔にいる者は家族だ”と。なれば……ワシもチヨも、リックの坊主もみな家族であろう？」

「坊主は余計じゃね？」

「未熟者は坊主で充分じゃ。怪我をせぬように立ち回れよ、リック」

レンジュウロウに頭をわしわしされて憤慨するリックを横目に、俺は決意を新た一步踏み出した。

「……ああ、家族を取り戻そう。そのためだったら、俺はなんだってできる」



馬に乗って学園都市の南門を抜ける。

すでに夜の帳が下り、西の空には小さな星明りがきらめきはじめている。

「速度的に考えて、宿場町までは移動していないはず。人数的にも、宿場町の外で野営をしている可能性が高いと思います」

チヨが糸を括りつけた親指ほどの甲虫を取り出して説明した。これも東方伝来の忍びの技らしい。人間には感知できない特定の匂いを追うように訓練した蟲を使い、その匂いを対象に擦りつけておくことで確実に追跡を行うそう。

……本当に、東方の技術というのは魔法とは違ったアプローチが多くて興味深い。

「チヨさん、出会った時に戦闘になる可能性は？」

「あちらはかなり密に斥候を放ち、警戒にあてています。この人数だと近寄れば確実に補足されるでしょう。故に、もし戦闘の意思があるならば、待ち伏せという形をとつてくると思われます」

なら、待ち伏せがあると考えて行動するべきか。

「……交渉できりゃいいんだけどな」

エインズの呟きに、俺は首を横に振って応える。

「金で解決できるならなんとかするさ。ただ、どうも二人を狙っていた節がある。実際マルポーナも別の手持ち奴隷を売りつけようとしていたみたいだし」

マルポーナから筆り取った記憶の断片にそういう情報があった。

しかし、『ダカー派』は「あの二人が欲しい」と、相当の報酬を積み上げて、強くマルポーナに依頼したようだ。あの姉妹をそこまでして欲する理由が浮かばないが、何かあるのだろうか……それに、二人を手に入れた途端に帰路につくというのも妙だ。

噂じゃ、あの集団は「探し物」をしていたはずではなかったのか？

まさか、その「探し物」がユウ達姉妹だった？

……いや、その線はないはずだ。

二人はエルメリア王国の王都出身で、『西の国』に来るのは生まれて初めてだった。『西の国』の島国に本拠地を構える少数民族につけ狙われる理由が見当たらない。

で、あれば……可能性としては俺への罠だろうか？

他の賢人達同様に、特異な☆1である俺に、何かしらの価値を見出したのかも知れない。だが、マルポーナに対して俺の身柄を要求していた様子はなかった。マルポーナにしても、俺については他の賢人に「レンタル」するための商品と考えていたようだし。

いずれにせよ、判断材料が少なすぎる。

そして、どんな実情や事情があろうとも……二人を取り返す。

もう一山、「死体の山」を築いても、だ。

焦燥に追い立てられながらも、冷静さをなんとか保って馬を駆る。バグナー冒険者予備学校で、冒険者の嗜みとして教えられた乗馬がこんな場面で役立つとは、人生わからないものだ。しばし無言で仲間達と街道を駆けていく。

この一帯は学生の課題や冒険者ギルドの依頼として魔物や野盗の討伐が頻繁に行われることもあってか、それらに遭遇することはなく、俺達は街道を最速で走り抜けた。

「……！」

先頭を走っていたチヨが不意に馬の足を止める——いや、止められた。

暗闇に目を凝らすと、特徴的な服装の人影が街道に立ちはだかっているのが微かに見える。

しかし、月の光に照らされているはずなのに、その姿を上手く捉えられない。

どうやら、相手手練れの斥候のようだ。

チヨの前に出たレンジュウロウが、馬上から彼らを見下ろして問う。

「……お主ら、『ダカー派』の者か？」

「それに答える義理はない」

服装とその答えが、すでに『ダカー派』であると明言しているようなものだが。

「マルボーナから不法に買い付けた者を、返していただきに参った」

口を閉ざしたまま、うつすらと殺気をにじませる二人組に、レンジュウロウが牙を見せて唸る。

「あまりワシをやる気にさせるなよ、小童ども。ワシは今、気が立つておる」

後ろにいる俺にもわかるくらい濃い殺気が、レンジュウロウの全身から放たれるのがわかった。

二人組は一瞬それにたじろいだものの、退く様子はなく、こちらを睨みつけてくる。

「……渡さぬ。我らの真なる世界のために。失せよ、篡奪者の末裔よ」

「何を……ッ！ 二人を返せ。お前達の都合など……知ったことじゃないぞ！」

俺の言葉を宣戦布告と見たのか、二人組が曲刀を抜く。

「……奥からも来ます！」

夜目の利くチヨさんが、増援を警告する。

この部隊展開の速さ、魔法か何かを使ってこちらの様子を窺っていたのかもしれない。

「真なる、神聖なるアズイ・ダカーの名において汝らを『浄滅』する」

「難しい言葉使ってんじゃねえよ！」

馬から飛び降り、双剣を抜いたリックが、曲刀の片割れと戦闘を始める。

増援から矢が数本飛来するが、〈矢避けの護り〉に阻まれて地面へと落下する。

突然の戦闘開始でも問題はない。すでに強化は完了している。

「やっぱりこうなのかよ！ まあいい、こいつら叩きのめして奪い返すぞ」

「わかりやすくていいぜ！ おらおら！ どきやがれ」

エインズの言葉に口角を上げて応えたリックの姿が、かき消える。

いや、速すぎて俺では追えなくなっただけだ。

〈敏捷強化〉〈迅速〉〈倍速〉でスピードを強化されたリックが、自身のユニークスキルである

【隼の如く】を使えば、もはや常人では捉えられない。手練れであっても、この状態のリックを押

し止めることは相当に難しいだろう。

さて、俺は俺で増援の対処にあたろう。冷静に、確実に……

マルボーナ塔で少しばかり人の命を刈り取りすぎたせいだろうか？　『穏便に』という単語が頭に浮かんでこない。

マルボーナはともかく、『ダカー派』の連中には直接的な恨みを持っているわけではない。

実際、剣を抜かれるまで話し合いで解決して……姉妹が必要などうしようもない事情があるなら、彼女達の身柄と引き換えに何か協力できれば、とすら考えていた。

だが、いざこうして戦いが始まってしまうと、妙に心が澄んでいく。濁りなき純粋な殺意が、俺の意識を冴えさせていくと感じた。

……それでも、そんな本能的な感覚を抑えて、目の前の増援部隊数人に語り掛ける。

「二人を返してくれませんか」

「邪魔をするな！　鱗なき者よ！」

拒否の言葉を放った手前の弓兵に、拾った石を〈必中投石〉で撃ち込む。

得物を持つ利き腕の肘から先を吹き飛ばされた弓兵が、悲鳴を上げてうずくまった。

「こっちの台詞だ。邪魔をするな……！　あの姉妹は俺のモノだ……ッ！」

俺はそのまま魔法式の構成に入る。

「Tio igitis la stonon de gruzo. Eksalis, krude versas！」（これなるは石の礫。飛び上がり、無作法に降り注ぐ！）——〈石の雨〉

ランクⅢ魔法を、いくつかの魔法節を破棄して唱える。唱えなかった分の魔法節は脳内で処理を行なった。バーグナー伯爵家を飛び出してきた冒険者予備学校時代の友人——ミレニアとの魔法の特訓が、意外なところで効力を発揮している。

スキルによる詠唱の高速化とは、すなわち魔法節の処理速度の加速だ。それを『無詠唱化』で代替して脳内で処理すれば、ハイランクの魔法の場合はどうか……という発想でもって研究していたのだが、ぶっつけ本番にしては上手くいった。

「ひっ……うああッ！」

「ぎいああー！」

大小さまざまな石がスコールのように降り注ぎ、数名からなる増援部隊を呑み込み、叩き潰していく。

小型の盾を構えて要所をカバーする者もいたが、いかんせんこの魔法を防ごうと思えば、体をまろごと隠せるタワースールドでも持つてこなければ無傷とはいくまい。

「投降を」

俺の短い促しに反応し、増援部隊が立ち上がって武器を捨てた。

俺は胸を撫で下ろす。何も、楽しんで殺したいわけじゃない。殺さないで済むならそれに越したことはない……と、トドメを刺したい衝動に駆られる自分を納得させる。

それにしても丈夫な連中だ。あれだけの石礫に打ち据えられてまだ立ち上がってくるなんて。

「鱗ナキ者ヨ……！」

捕縛^{はくばく}の魔法をかけようかというその時、粗い金属をすり合わせたような声が目の前の男の口から漏れた。

……何かおかしい。

「ギィアアアアアッ！」

絶叫のような咆哮^{ほうこう}を上げて男がうずくまる。

その背中が盛り上がり、男の顔が……いや、全身の肌が黒く変色していく。

身につけた外套^{ヘイコウ}を裂きながらその体が巨大化し、黒く変色した肌が徐々に鱗に覆われていくのを見て、俺は納得し、そして戦慄^{せんりつ}した。

奴らが口にした『鱗なき者』とは、せいぜい、信者でないものを指す言葉くらいにしか考えていなかったのだが、文字通り鱗を備える姿に変身するなんて予想外だ。

「鱗ナキ者ヨ……！ 見ヨ、コレガ救イデアル」

金属質な声で話す男のその顔は、蛇かトカゲを思わせる爬虫類^{はちゅうるい}めいた風貌^{ふうぼう}になっていた。体は梟熊^{アウルク}などの大型の魔物よりも大きく、指先には強靱^{きやうきん}そうな爪を備えた姿に変化している。

「蜥蜴^{リザードマン}人か？ いや、それにしても人としての要素が少ないな」

蜥蜴^{リザードマン}人は、『西の国』のさらに西、『ウエストエンド諸島』に一大勢力を構える獣人族だ。彼らもドラゴンを信仰しており、その隠された神殿の最奥には本物のドラゴンがいると言われている。

「我ハ竜トナル者！ 『アズイ・ダカー』ト共ニ歩ム者！ スナワチ『竜従者』ナリ」

蜥蜴^{リザードマン}人扱いがお気に召さ^めなかったのか、変異した男——『竜従者』が口から緑色の炎を覗^{のぞ}かせる。

「〈水幕Ⅱ〉。続いて、〈耐火Ⅱ〉」

無詠唱で二つの魔法を自分にかけながら身をよじる。

吐き出された炎が、俺をかすめるが……よし、大したダメージではなさそうだ。

常駐させた強化魔法の上からこれらを使用すれば、それほど脅威^{きやうい}ではない。

「無事かよ、アストル！」

突然、リックが俺の隣へと現れた。なかなか心臓に悪いな。

「一人で飛び出しおって、ヒヤヒヤさせるでないわ」

レンジュウロウの小言を軽く流し、リックが視線で『竜従者』を示す。

「さっきの奴らは片付けた！ で、コイツはなんだ？」

「気をつける……人間に化けた小型の『竜』らしい」

俺の言葉を聞いたリックが息を呑むのがわかった。

冒険者にとってドラゴンとは憧れ^{あこが}の有名魔物^{モンター}であると同時に、迷宮で絶対に出会いたくない存在だ。それが目の前に三匹……

今や五人いた増援のうちの三人が、その姿を醜悪^{しゅうあく}な『竜従者』へと姿を変えていた。残った二人は変異しないようだが、何か理由でもあるのだろうか。

「何を冷静に……！ 人が物の怪^{もののけ}に変わるなど！」

レンジュウロウが普段は見せない焦った様子で大槍を構える。

「アストル、ミントの気配はどうだ？」

体ごと俺達の先頭に滑り込んだエインズが、盾を構えたまま背中であんなに問う。

「感じるが、弱い。眠らされているか、魔力を遮断する魔法道具があるかだ……。いずれにせよ、こいつらを叩いて馬車のところまで行かせてもらう！」

俺の言葉に反応したのか、変異した者達が一斉に動き出した。

チヨの姿が見えないのは、逆に安心だ。おそらく、二人の救出に向かってくれているのだろう。

「来いよ、トカゲ野郎！ 見切れるもんならな！」

リックが【隼の如く】を使って加速する。

次の瞬間……『竜従者』の一人が小さく血しぶきを散らす。

「くっ、浅いな……！ 鱗がかてえ」

「鱗ナキ者ヨ……！ コノ姿ヲ見タ以上、生キテ戻ルコトハデキヌ」

リックに迫るその巨体に、大槍が深々と突き刺さる。レンジュウロウが投げた大槍だ。

「突止！ 面食らいはしたが、お主ら程度……我が伏見流の敵ではないわ……！」

刺さった槍をそのままに、レンジュウロウが腰の刀に手をかける。

その瞬間、ぞわりとした怖気が背中を駆け抜けた。

「――徒花と散れ」

てつきり【必殺剣・拔刀】を使うのだろうかと思っていたのだが、違った。

殺気が膨れ上がり、それが実体化するかのような鋭利さをもって周囲を威圧する。

「我……全ての戦場で駆け、全ての戦場で斬り、全ての戦場を絶つ者也」

それはあまりにも非現実的な剣技だった。

神速の抜刀斬りから回転斬撃、流し斬り……そして最後は飛翔するが如き斬り上げ。

そのどれもに、一撃必殺の要素が詰まったものであるのは誰の目にも明らかだった。

「――殺撃の太刀、『花鳥風月』。ここに相成らん」

「クカツ……ギギギギ……ギ、キィ……」

斬られた『竜従者』が徐々に傾いていく。その体がいくつかに分断されてズルリと転がるのに、

そう時間はかからなかった。

「まずは一つじゃ。アストル、お主は行け」

「でも……！」

「構わぬ。ワシもな、いささか頭にきておるのよ。今宵は、侍ではなく武者として立たせてもらおう」

ちらりと見ると、エインズとリックが俺に目配せしてくる。

「この程度ならオレらで充分だ。ただし無茶すんじゃないぞ！」

「……わかった。先行する！」

俺は三人に頷いて、野宮があると思われる方角へ街道をひた走った。



焚火に照らされた数台の馬車が見える。

周囲には物々しい様子で警戒している者がいるが、幸い俺は気付かれることなくそれらを視界に入れられた。

付近の背の高い草むらに隠れ、〈望遠〉の魔法で様子を窺う。

そこに、チヨがするりと影から姿を現した。

「……ざっと見てまいりましたが、どの馬車かは見当が付きませんでした。申し訳ありません」

「手薄なところは？」

「裏に回り込めば多少手薄ですが、馬車は一箇所に固まっておりますので……」

「正面突破しかないか」

『魔法の小剣』を握りしめて、妙案がないか模索する。

弱々しいとはいえミントの気配がする以上、あの集団の中に姉妹が囚われているのは間違いないはずだ。

「お父様達は？」

「変異した連中と戦闘中です」

チヨがはてと首を捻る。

「変異……？ 人ではないのですか？」

それに関しては、俺にもよくわからない。

あの『竜従者』が人に化けているのか、人が『竜従者』となるのかは不明だし、体を構成する

理力を別物へと作り変えるのは、熟達の魔法使いでもないかぎり、簡単なことではない。

「とにかく、奴らのうちの何人かは馬車くらいのデカさの小型の竜に変異すると思ってください」

「承知いたしました。さて、どうしましょうか」

このままエインズ達が追いついてくるのを待つのも手だが、集団の様子が少しおかしい。

警戒態勢が厚い上に、何か作業をしているようにも見える。

「……まさか」

「はい。一部を先行させる準備に見えます」

その一部に姉妹が含まれているとすれば、待っている間に逃げられてしまうかもしれない。

『竜従者』の耳障りな咆哮でこちらの馬は逃げてしまったし、一度軽い馬車で走り出されれば、疲労した俺達では追いつけない可能性がある。そのまま船など乗られたら、ミントの命は確実に失われる。何しろ、以前一度死にかけたミントは、俺との繋がりがないと魂を維持できないのだ。それに、そんな事情がなかうと、ユユだってどうなるかわかったものじゃない。

「仕掛ける」

「はい。わたくしが攪乱と陽動を行います。おそらく出発の準備をしているあの馬車に二人がいるのでは？」

たしかに、今荷物を下ろして軽くしている馬車に二人がいる可能性は高い。

あの馬車さえ足止めできれば——あるいは、馬と馬車を使い物にならずれば、二人を運ぶ手段がなくなるだろう。

「あの馬車を押さえて、残りの馬車には火を放つ。馬は可哀想だが、殺してしまおう。足を奪えば容易に動けないはずだ。〈煙幕〉の魔法で視界を悪くして、騒ぎに乗じて二人を奪還する」

「了解いたしました。では、これを」

チヨが丸い何かを俺に差し出した。

「これは？」

「煙玉です。魔法の〈煙幕〉のように視界を遮りますが、魔法ではないので〈魔法解除〉で散らされません。おそらくですが、魔法使いが潜んでいると思われますので」

煙玉を受け取って頷く。そして、ありったけの強化魔法をかけて、タイミングを計る。

「距離と場所の確認はよろしいですか？」

俺は頷いてチヨに答える。

「魔法で視覚を確保しますので、大丈夫です」

「では、参ります」

続けざまに二つ煙玉を投げ込んで駆けていく彼女に続いて、俺も馬車の方向へ向かって煙玉を放り投げる。動くものにぶつけると言われれば難しいが、これを投げるくらい俺にだってできる。

……少し逸れたけれど問題はない。

魔法で強化された敏捷性でもって、目標の馬車へと走る。

護衛らしい人影は二人。立ちこめる煙に警戒して周囲を見回しているが、俺の姿は見つけられないようだ。

俺は発動待機していた〈麻痺Ⅱ〉をユニクススキルの【反響魔法】による繰り返し込みで護衛一人に対し三度ずつ放つ。

この深度の麻痺になると、ちょっとした呼吸困難などを引き起こすかもしれないが、いきなり命を取るよりはましだろう。抵抗するならそのまま魔法で窒息死させればいい。

「ギギギギッ」

麻痺しているはずの一人が、例の金属質な唸り声を上げる。

馬車の護衛に変異できる者を一人付けていたか……！

距離を詰め、変異しはじめた頭部に向かって二度、〈魔突杭〉を撃ち込んで沈める。竜の眷属といえど、さすがに頭を吹き飛ばされては生きてはいないだろう。

変異しない見張りについては、放っておいて馬車に近づく。

準備をしていた馬車には、騒ぎの中で慌てながら作業する者達の姿があった。

武装はしていないので、おそらく護衛ではないと思うが、邪魔をされても面倒なので、〈眠りの霧〉の魔法を周囲に流しておく。

数人がふらふらと動きを止め、膝をつく。魔法の効きからして、やはり非戦闘員だろう。

……ただ一人を除いては。

「ネズミがいるようだな？」

馬車の最も近くで指示を出していた褐色の肌の若い男が、鋭い視線で俺を捉えた。手練れであることが一目でわかるほどに、その所作は洗練されている。



武装はしていない。魔法使いの類だろうか。

「……二人を返してもらおう」

「ああ、そういえば……あの時『運命子』と共に居た小僧か。返すも何も、『カダールの子ら』は元より我らの血脈の者。一族の定めを果たすために国へ戻るのは、当然の務めであろう？ 篡奪者の末裔の薄汚い法に従って手切れ金までくれてやったというのに」

「マルボーナのことを言っているなら見当違いだ。あいつは人でなしの人攫いで、俺とはなんの関係もない！」

俺の言葉に、男は盛大にため息をついて見せる。

「鱗なき者よ、痴れ者よ。お前が、お前達がどう取り繕おうが、カダールの『運命子』は我らの宝で財産だ。不当に奪われたものを取り戻すことになんの問題がある？ お前達は土地を奪った上に一族、家族まで奪い尽くそうというのか？」

平行線どころじゃない。話自体が通じていないようだ。

「どういうことだ、二人は王都の出身だぞ！ お前ら『ダカー派』となんのかわりがあるって言うんだ!？」

「お前達薄汚い篡奪者が島に入り込んで奪い取っていったのだよ！ 『運命子』の血族であるカダールの女をな！ あの髪と瞳……それに香りでわかる。あの二人は我らが悲願となるカダールの『運命子』だ」

二人が以前話していた“母親の故郷”とは……まさかダマヴンド島だったのか？

しかし、ユユ達の母親は逃げ出したと言っていたはずだ。

……となれば、母親が逃げ出したような場所に二人を戻すわけにはいかない。

「二人の意思を無視して連れ去ることに、一族も家族も悲願もあるものかッ！ 二人を返してもらうぞ！」

踏み込んだ俺を前にして、男が構える。

「愚かな。話も通じぬとは……。蛮族の篡奪者どもは、相も変わらず厚顔無恥というわけか」

次の瞬間、目の前に男の姿があった。

「遅く、拙い」

「あぐ……？」

その拳が俺の右頬を捉え、俺は回転しながらその場に転倒する。

発動待機していた〈風圧〉を利用して即座に体勢を立て直したが、これはまずい。
顎がガタつく。口の中が切れて、徐々に血の味が広がっていく。

……武器を持っていないのではない、徒手空拳に特化したタイプだったようだ。

しかも、相当な手練れ。レンジウロウのような、強者の佇まいがあの男にはある。
だからと言って退くわけにはいかない。ユユもミントもすぐそこだ。

「珍妙な技を使う。しかし、それでは吾には勝てんぞ。見逃してやる……と言いたところだが、同胞を討たれたのだ。ただで帰すわけにはいかん」

「逃げるものか。そうはさせない。……ユユも、ミントも返してもらおうぞ」

「何度も言うが、あれらは我らがアズイ・ダカーに捧げられるべき大切なカダールの『運命子』だ。
お前のものではない」

……捧げる？ 生贄だというのか？

「バカな……イカレてる！ 野蠻なのはお前達の方じゃないか！ 二人をなんだと思ってるんだ！」

〈魔法の矢〉を連射しながら、駆ける。

「我らの悲願を達成するカダールの『運命子』だとも。最高の栄誉と幸福が約束されている。我らの信仰を、愛を、理解できぬからと糾弾し、追いやったお前達篡奪者にわかってもらおうとは思わぬがな！」

男は魔法弾を素手で弾き飛ばしながら、俺をゆっくりと追う。

一人で相手取るのは難しい。エインズ達の助けが必要だ。

とにかく、今は逃がしさえしなければいい。この膠着状態をできるだけ長く続けるのが最善手だ。

「時間稼ぎ……のつもりか？ こちらも準備は整ったので、構わないがな」

「なに……？」

男ばかりを追っていて、馬車の方を確認していなかった。

いつの間にか、馬車に繋がれていた馬が消え、代わりに荷台に複数のロープが掛けられている。
そして、その上空では二匹の翼竜が翼をはためかせていた。

「ユユ！ ミント！」

ふわりと浮き上がる荷台に向かって叫ぶ。

「さらばだ、篡奪者よ。殺せなかったのは惜しいが……吾にも優先順位というものがある」
そう言い残し、男は最後に残ったロープにつかまって空へと飛び上がった。

「待て！」

「断る。大願成就のため、我らが悲願達成のため……お前ごとき俗物に構っている暇などない」
男と荷台の高度が上がリ、徐々に遠くなっていく。

「くそッ！ 何か……」

周囲を見渡すが、残った馬車しかない。

まだ戦場の只中ただなかににいるというのに、虚脱感と絶望感が心を溺れさせていく。

なんとか踏み留まって、戻ろうとする俺の耳に小さな声が届いた。

「あなた……こっちへ……！」

残された馬車の一つから、人影が手招きしている。

畏かもしれないと思いつつも、俺は警戒したまま馬車へ近づく。

馬車から顔を出しているのは、壮年の女性だ。敵意はないように感じられる。

「非戦闘員なら、おとなしくしててくれ」

「あなたがアストルさん？」

女性は真っ直ぐ俺を見つめてそう尋ねた。

「……？ そうだ」

俺の返答に、女性が馬車の中にいる誰かに頷くのがわかった。

何か攻撃があるのかと思いつつも、数人の女性が俺の前に運び出したのは、白いシーツのようなものでぐるぐる巻きにされたベリーショートベリーショートの少女だ。

短くなったストロベリーブロンドの髪は不揃いで、顔には少し擦り傷があるが、命に別状はなさそうだ。

「ユユ……！」

急いで駆け寄って、抱き上げる。

意識はないようだが、その温かな体温はユユがまだ生きていることを俺に実感させた。

「どうして？ いや、それよりも……。ありがとうございます！」

俺は敵であるはずの相手に深々と、そして無防備に頭を下げる。今この瞬間に襲われでもしたら一巻の終わりだとわかっていながらも。

「ミントさんに頼まれたのよ。なんとしても、って」

「ミントが……!?」

「私、この子達の遠縁にあたるの。二人の母親のことだって知っているわ。ミントさんが妹だけはどうしても……もうすぐ結婚するんだって。それを聞いて、私達協力することにしたの。それでミントさんと一緒に一芝居打ったのよ」

女性曰く、ユユの髪の毛と服、それに綿や藁で人形を作ってカモフラージュしたらしい。

「くそ、ミントめ。また悪い癖が出たな」

ミントは少し自己犠牲が過ぎるところがある。今回も、自分のことは何も考えていない。長い間俺と離れていれば、死んでしまっただぞ……お前。

「ユウさんはあえて起こさないでいたの。起きたらきつと反対するからって、ミントさんがね……。もうすぐ薬が切れるから安心して。髪の毛、綺麗だったのにごめんさいね」

「いいえ。みなさんに心からの感謝を。……でも、こんなことをして大丈夫なんですか？」

「男達はいつも自分勝手よ。アズイ・ダカー様の降臨は変革をもたらすでしょうけど、きつと世界に傷をつけることになる。私達は日々の生活で幸せならそれでいいの。男達にはそれがわからないのよ。いつまでもこぼれ落ちたものを追いつぎ……。今回のこれは、私達の小さな反乱でもあるわ」

女性がしわの深くなりはじめた顔に寂しげな笑みを浮かべる。

『ダカー派』も一枚岩ではないようだ。

「ここで大人しくしておいてください。少なくとも怪我をすることはしないでしょ」

「私達は少ししたら南へ向かう。島に帰るの」

「いいんですか？」

「その生き方しか知らないのよ。それに家族が……一族がいる。衰退して滅びゆくとしても、私達は最期まで『ダカー派』として生きるわ。さあ、一旦退いてくださいな。お互い、これ以上の戦いは必要ないでしょう？」

この女性の方が俺達より、よほど状況が見えている。

俺は再び深く頭を下げると、ユウを担ぎ上げ、背の高い草原地帯に身を隠しながら戦闘区域を避けて街道を戻った。



「ん……」

戦闘を引き揚げて撤退した先、ウェルス方面へと少し街道を戻ったところ——追跡案を練るために作った簡易の野营地——で、ユウが目を覚ました。

「……ここ、どこ……お姉ちゃんは……？」

ぼんやり周囲を見回すユウ。

「ユウ、目を覚ましたか」

「アスト、ル？ 無事、だったんだね？」

ユウが俺の頬を撫でる。

「ああ、俺はなんともない。でも、すまない……ミントが」

「……！ そう、だった。ユウ達、煙に包まれて、そこから覚えてない。どうなったの？」

「まずは落ち着くのじゃ、ユウ。お主も知恵を貸してくれ」

レンジュウロウがユウに湯気の立つカップを渡しながら宥めた。

それを口に含み、再びユウが俺を見る。

「二人が呼ばれたあの面談は、マルボーナの罠だった。取り返しに行った時すでに二人は『ダカー派』に攫われた後で、俺達はそれを追った」

「『ダカー派』？ そう、あの人達が……」

「ユユは協力者がいて助けられたけど……ミントは連れ去られた」

「ん。助けに、行く」

すぐさま、ユユは広げている地図に目を走らせる。

彼女は学園の講義で地理を学んでいるので、こういう作戦の立案には欠かせない知識を持っている。

「この赤い点……ダマヴンド島……？ 聞いたこと、ある。そうだ、母さんの故郷……！ ああ、そう……なんだね」

ユユは地図に指を滑らせながら、何かを確認するようなそぶりを見せる。

「双子の花嫁……二つの魂の共鳴、王女達の依り代……。そう……うん」

小さく呟き、何かを納得した様子で頷く。

「大体わかった、よ。急がないと、ダメ」

やり取りを聞いていたエインズが、困り顔で首を傾げる。

「何がわかったんだ？ オレにわかるように説明してくれや、ユユ」

「ユユとお姉ちゃんは『運命子』って呼ばれる、特別なカダールの血族の姉妹。竜の神様に捧げられて、その両翼になることを、定められた者……それが、ユユ達」

ユユの説明は、あの男のいくつかの言葉とも合致する。

どうして、急にそんなことを……と思ったが、俺は口を挟まずに続きを促す。

「いろいろ思い出してきた。母さん、伝承させた、のね……」

「伝承？」

思わず聞き返した俺に、ユユが頷く。

「母さんの……うん、カダール一族のユニークスキル。知識や技術、記憶を血族に受け継ぐスキルが、ある。このタイミングで、思い出したことにはきつと、意味がある」

それは儀式を成就せよという願いか、それとも阻止せよという意志か。

いずれにせよ、姉妹を犠牲になんてできない。採るべき選択は阻止一択だ。

「……母さんは、きつと止めたかったんだと、思う。島から、逃げたくらいなもの」

「じゃあ、止めよう。どっちにしたって、ミントは絶対に取り戻す」

「ん。ユユも、行く」

「それは……」

危険だ——と、動きそうになる口を嚙む。

本当は連れて行かない方がいいんだろう。取り戻したユユを、危険なダマヴンド島に連れていくことにどれほどのリスクがあるかなど、わかっていない。

だが俺は、彼女の瞳に映る決意に抗えなかった。その瞳は、姉であるミントを助けることも、母の願いを繋ぐことも命を懸けるに値するのだと、強く語っている。

「……わかった。今度こそ、俺が守るよ」
「ん。信じてる。アストルなら、大丈夫」

軽く抱きついてくるユコの頭をやんわりと撫でる。

髪の毛が短いせいか、いつもと触り心地が違う。

「む、髪……ない？」

「ないんじゃない、短くなったんだ。この髪型も似合ってるよ」

「じゃ、いい」

ユコが落ち着いた頃を見計らって、エインズが切り出す。

「話がまとまったんなら、作戦会議を続行すんぞ。おそろくダマウンド島に向かった連中を追わ
にやらん。ミントの生存タイムリミットはどんなだ、アストル？」

「理力漏出が始まるのが早くて一週間、漏れ出してから動けなくなるまで一週間。動けなくなっ
てから魂が離れるまで三日……ってところだな。これはミントが安静状態を保っていればの話だ。怪
我をしたり、何かしらの影響で魔力を抜かれたりしたら、さらに早くなる」

つまり、最悪でも二週間以内にはミントとの繋がりを感じられる位置まで接近せねばならない。
レンジウロウが難しい顔で唸る。

「地図によると、ここからポートアルムまで約五日。そこから船で二日ほどの距離じゃが……」

馬はすでに逃げてしまっている。『ダカー派』の馬を拝借するのもいいかもしれないが、迂闊に
戦闘をしてこちらに被害が出るのは避けたい。

「ここから、少し西へ行つて、旧街道のメドナ村に行こ。あの集落は大きいから、きっと馬を、借
りられる」

ユコが地図を指でなぞって示した地点を、レンジウロウと俺が覗き込む。

「遠回りになるが……馬がある方が何かと良いかもしれん。馬車が借りられればもつと楽だがの」

「どちらにせよ、こっちの街道は『ダカー派』の連中に遭遇する可能性が高い。なら、旧街道で南
下してポートアルムへ向かう方が安心だ」

無駄な戦闘は避けたいし、何よりあの協力的な女性達を戦いに巻き込むのは好ましくない。

「じゃあ、そうしようかの。警戒中のチヨが戻ったらすぐに移動を始めるでしょう」

「お、話決まった？」

見張りに立っていたリックがこちらを振り返る。

「ああ、この街道は進まないで、西にある旧街道を進む。可能ならば馬か馬車を手に入れるつも
りだ」

「遭遇避けにはいいんじゃない？ あの『竜従者』とかいうの、手強いし……。足止めに回られた
ら厄介だ」

なんだかんだ言いながら、リックは冷静に戦力差を分析している。

勝てない相手ではないが、あの連中に延々と時間稼ぎをされれば、時間と体力が足りなくなる可
能性が高い。奴らは人数でも上回っているの、夜でも奇襲を仕掛けてくるだろうし、休む暇がな
ければこちらとて疲弊していく。

俺にしても、今日一日で魔力を使いすぎて、もう魔力枯渇寸前だ。この先も戦闘があることを考えれば、道中の余計な戦闘は避けなくてはならない。

「じゃあ、起きたばかりですまないが……行こうか、ユユ」

「ん。だいたいよぶ」

「その……辛いかもしれないけれど、儀式についても教えてくれないか？」

「わかってる。ユユだけじゃ、止められない。けど……アストルと一緒になら、きつといける。お姉ちゃんも助けて、儀式も……止める。でないと……」

言い淀んだユユが、意を決したように口を開く。

「世界が、滅びちゃうかもしれないから」

「世界が、滅びる？」

ユユが発した一言が、引つかかる。どこかで聞いたフレーズだ。

……そう、俺が『光輪持つ炎の王』をスキルで完全に顕現させた時、元伝説級の冒険者の母に言

われた言葉だった。

「えー、と……アストルは『ヴェンディの書』読んでた、よね？ 封印図書の」

「ああ、世界の終焉を引き起こす十六の災厄の……」

「その起点となるのが、『アズイ・ダカー』の復活、なの」

『ヴェンディの書』は『ダカー派』を調べる際に当たったいくつかの資料のうちの一つだ。

読んだ時は「滅亡」だの「終焉」だの、あげくに「永遠の闇」などという物騒な言葉が頻出する

胡散臭い内容の古文書というイメージしかなかったが。

しかし、確かにあの書物の中には『アズイ・ダカー』の名が出ていた。

この竜とも蛇とも見える有翼の神が降臨すると、内容は不明だが『十六の災厄』が人類にもたらされ、真に正しき者以外は全て滅び去り、世界は闇に閉ざされる。

生き残った者達は王となった神と共に、永遠の命が約束される……とも書いてあった。

「話がデカくなってきたな」

リックがついていけないといった様子でこぼした。

「なに、やることは簡単だ。儀式にミントが必要っていうなら、取り戻してご破算にする。ついでに島ごと焼き払って、二度とそんな気が起きないようにしてやればいい」

その言葉を聞いたユユが、俺の手を握る。

「アストル、ちょっと……ヘンだよ？ 少し、怖い」

「俺は、俺だよ。でも少し……ほんの少し頭に来てるだけだ」

「ユユ達の、せいだね？」

「そういうわけじゃ……」

ユユは言い淀む俺の目をまっすぐに見てから、手を伸ばして俺の頭をくしゃりと撫でる。そしてそのまま、抱きついて薄く口づけをした。

頭の奥の方で明滅していた怒りや絶望が、それですっと引いていく。

「ユユ……」

「だめだよ。無理をしたら、アストルが歪^{ゆが}んじゃう」

そうか、俺は無理をしていたのか——抱擁されたまま納得する。

指摘され、拭^{ぬぐ}われて、初めてそれに気が付いた。人を殺すことに、情け容赦^{じょうしや}のない行動をとるために、俺はいくつかのモノを捨てた。捨てなければ心がついていかなかったのだと思う。

それなのに、ユユはこともなげにそれを拾い上げてみせた。

本当に、この娘は……俺にとつての全てなのだ実感させられる。

「うん。ありがとう、ユユ。少し冷静になった。ミントを助けて、儀式自体を阻止する。……良い方法を考えよう」

「ふむ、いつものアストルが戻ってきたのう？ 修羅^{しゅら}の如き気配が失せておるわ。どうやったのだ、ユユ？」

「ヒミツ。アストル限定。チヨさんにも教えておく」

「チヨに？ ワシではなく？ ふむ……難解なことよな」

レンジュウロウに小さく微笑むユユを見て、俺は少し不思議に思った。

ユユはもつと狼狽^{ろうばい}するものだと思っていたが、とても静かで穏やかだ。

「ミントが攫^{さら}われて、不安じゃないのか？」

「少し不安だけど、ユユは、アストルとみんなを信じてる、から。アストルは、いつだって無理も不可能も、覆^{くがえ}してきたもの」

目を瞬^{しほた}かせる俺に、ユユは再び微笑んで呟く。

「アストルは、すごいんだから」

その言葉が、俺の心の深い部分に浸透していく。

俺は俺自身の評価を変えない……いや、変えられない。それは俺が持つて生まれた『不利命運^{デイスアドバンス}』と呼ばれる性質で、今後も変えることは難しいと言われた。

だが、ユユが……俺の手を引いて導くユユがそう信じるのであれば、俺はそうあらねばならない。ユユが信じるに値する俺でなくてはいけないのだ。そして、彼女のためなら、俺はきつとそうできる。

「わかった。今度も上手くやれるように、いろいろ考えてみよう」

ユユに頷いて、早速少し考える。

根本的な解決が必要だ。

ユユとミントを必要としている以上、儀式そのものを破壊してしまうしかない。

あるいは、伝承者全員の記憶からそれらの知識をごっそり抜き出してしまいか。

あの女性達のこともある、できるだけ殺さずに済む方法を考える。

どうしようもなくなった時は、自分の手を汚す。

姉妹がその責を負わないように、秘密裏に。

「……お待たせいたしました。周囲の警戒が終わりました。魔物^{モンスター}の小集団がおりましたが、すでに処理済みです」

斥候から戻ってきたチヨを、レンジュウロウが労^{ねぎ}う。

「ご苦労。ルートの確認もできておるかの？」

「すでに。そう遠くない場所に野営に適した場所がありました」

俺は地図を確認し、みんなに方針を告げる。

「了解。野営地で朝まで待って、旧街道を南下。メドナで馬を借りてポータルムを目指すことにしよう」

「承知しました。先行警戒はどういたしますか？」

「できるだけ密に。向こうはワイバーンを手なずけているから、こちらを追撃してくるかもしれないし、旧街道に斥候を送ってくるかもしれない」

「かしこまりました」

俺の言葉に頷いたチヨの姿が、夜の闇に溶けていく。夜間は闇の精霊を従えた彼女の独壇場だ。

警戒は任せておこう。

「それじゃあ、行こう。ユユ、立てるか？」

立ち上がって、ユユを引っ張り上げる。

魔法薬で長時間眠らされていたのだ、本調子ではないだろう。

「ありがと。作戦、浮かんできた？」

「情報が足りない。細かいところはミントを見つけてからだな。……その、お母さんから受け継いだ知識を後で教えてくれるかな？」

「わかった。野営地についたらね。教えるけど、無茶するのは、ダメだよ？」

「ああ……わかってるよ」

そう応えながらも、俺は頭の中でその「無茶」がどのくらい可能なかを計算していた。

ミ斯拉の頭現に、古代魔法、魔力変換……どれもこれも負担が大きい。状況を大きく変えることができるとはいえ、おそらく大きなリスクが付きまとう。

だが、俺を殴り飛ばしたあの男ほどの手練れが何人もいると考えれば、多少の無理や無茶はやってみせなければならぬだろう。

……それに、相手は伝説の邪神だ。

手札を惜しんでゲームに負ける——なんて言葉があるが、適切な手札を適切なタイミングで切る必要がある。

何せ、俺達は手持ちがやや不足しているのに対して、相手には強力な手札が山ほどあり、すでに切り札の準備が整いはじめているのだ。

「世界を救う、ね。こういうのはシステイルちゃんの領分なんじゃねえの？」

余程俺の顔が深刻そうだったのか、リックが冗談めかして言った。

俺の妹のシステイルは、ユニークスキル【勇者】持ちだ。確かに、世界のために戦うなんて、いかに勇者の役回りだが——

【勇者】があるからといって、邪悪と戦う義務はないさ」

「それもそうか。別にオレらが決着つけちゃえば問題ないんだろうしな」

リックは気軽な調子で言うが、これで慎重なところがある男だ、そう話すだけの勝算をどこかに

見出しているに違いない。

その言葉を聞いて、レンジュウロウがニヤリと笑う。

「ほう、坊主。なかなか大きなことを言うではないか」

「坊主じゃねえって。ここにアストルがいるだろ？　なら、勝ったも同然だ。でも、オレも頑張るぜ？　ミレニアお嬢さんに結婚を申し込むには、まだまだ戦功が足りねえからな」

「……ん？」

揃って歩みを止めた俺達を振り返って、リックが不思議そうな顔をする。

「なんで、みんな黙るんだ？」

エインズが、驚いた様子のまま返事をする。

「いや、そりやおめえ……びつくりすんだろ」

俺に至っては言葉が出てこない。まさに、なんと言っているかわからない状態だ。

リックがミレニアを……？　いつからだ。全然気が付かなかった。

「いや、わかってるよ……ミレニアのお嬢さんがアストルを好きなのは。でも、仕方ないだろ？　これでもちゃんとアストルとのことが落ち着くのを待ってたんだけ？」

どう仕方がないのかわからないが、リックの中では色々整理がついているらしい。

「なので、ここでも……と戦功を立てておかねえとな。『竜殺し』の称号でもあれば、箔がつくつてもんだ」

「応援させてもらうよ、リック。まずはミントを助け出さないと」

「おうよ」

互いに拳を当てて少し笑う。

この先は死地になるかもしれない。俺には俺の、リックにはリックの『戦う理由』がある。

「男の子って、少し、ヘン」

「女子にはそう映るかもしれないのう」

小さなため息をついたレンジュウロウが、ベリーショートになったユウの頭をわしわしと撫でた。

しばらく歩くと、暗闇の中からチヨの声が響いた。

「……前方にあるのが野営地です。わたくしはもう少し範囲を広げて警戒を行います」

「わかりました。お願いします」

そう応えて荷物を下ろしはじめた俺に、エインズが声をかけた。

「あ、そうだアストルよ。手紙を飛ばしてくんねえかな」

「わかった。すまないな、大事な時期に」

でも、遠出すんなら知らせておかねえとな」

早速紙を取り出してペンを走らせるエインズを横目に、俺も短い手紙をいくつかしたためる。システイルの面倒を見てくれる先輩賢人のマープルに、塔の警護を依頼しておかないといけないし、妹達にも事の次第を知らせておく必要がある。

『邪竜アズィ・ダカー』——相手が相手だ。何が起るかわからない。確実なことは一つも言えないが、何も知らないよりはましだろう。

「じゃあ、飛ばすぞ」

エインズから手紙を受け取って、〈手紙鳥〉の魔法を使う。

続いて俺の手紙も。

「……これでよし。火をおこして食事の準備をしよう」

周囲に向かっていくつか〈灯り〉の魔法を使うと、不意に、初めて魔法を使つてはしゃぐミントの顔を思い出した。

——もっと早く繋がりを切断しておけば、こうはならなかった。俺の研究に付き合わせたツケがこれだ。……絶対に助け出す。

小さく決意して、来る途中で拾い集めた枯れ木を組み上げて火をつける。程よく乾いていたので、すぐに火の粉を散らして焚火が完成した。

チヨが戻るのを待つて、パンと炙ったハムの簡素な夕食を食べつつ今後を話し合う。

「ミントの救出が第一目標だが、どちらにせよ、ダマヴンド島には行こうと思う」

「ふむ。邪神復活の芽は摘んでおかねばならぬ……。じゃがアストルよ、必ずしも我らの仕事というわけではあるまい？ 国難ともなれば『西の国』にはそれに対処できる英雄は多い」

競争主義の強い『西の国』では、各々の領に英雄クラスの人間を囲っていることが多い。特にそれを抱えているのは、ウェルスだったりするが。

彼らの武勇は、主に隣領に対する牽制や、中央議会での発言力を増すためのものだが、いざ戦争や魔物災害などの国難となれば、それらの人材が惜しみなく投入される。

「復活してからじゃ遅いし、ミントを取り戻して阻止したら国難にはなりませんからね……。でも、ソレがある限り、ユユとミントは狙われ続ける。なら、徹底的に処理しておかないと」

「どうするつもりじゃ？」

「そうですね、方法としては……。いくつか考えがあります。到着してから最適なものを選びますよ」

頭の中でシミュレーションしてみる。どれもこれも可能ではあるが、リスクが付きまとう。

しかし、姉妹のためなら被つても問題ないリスクだ。

……☆1の軽い命くらい、賭けてみせようじゃないか。

「それで、ユユ……ダマヴンド島へは簡単に行けるのか？」

「船がないと、だめかな。それに侵入者防止用の海棲生物が、いるはず」

なるほど、邪教の本拠地は防衛も完璧ってことか。

「ふむ、ならば奴らの船に忍び込むしかないかのう？」

「ユユを匿ってくれた人達に頼み込むか、自前の船で行くか……船を出してくれそうな人がいればいいけど」

「話を聞く限り、いなさそうだけだな」

エインズの言葉に頷く。

しかし、手段はある。俺達六人が乗ればいいだけなので、大型の船は必要ない。小型の船であれば、多少魔法を応用すれば海を渡ることは可能そうだ。

俺のかつての自宅のように、少し時間をかけて改造してやれば、ちょっとやそつでは壊れないだろう。

「船は、借りるか買うかできればなんとかするよ」

「アストルに考えがあるなら、オレはそれでいいぜ」

リックが無邪気な笑顔を俺に向ける。

こいつの頭には俺を疑うって選択肢はないらしい。そしてそれは、他のみんなも同様だった。

「む。ユウ、装備、ない」

「俺が持ってきているよ。一階に置いてあった分だけけど」

二人を助けた際に丸腰なのもどうかと思い、一式持ってきている。

ミントの鎧はさすがに重かったたので、『ねんきんかうさかいどう粘菌封鎖街道』で使っていた軽量鎧の方が。

「さすが、アストルはわかってる」

俺が取り出す装備や道具を受け取りながら、ユウが顔を綻ほころばせる。

「これで、ユウも戦える。魔導書も、入ってて助かった」

「ああ、頼りにさせてもらうよ、ユウ」

俺達の様子を見て、エインズとリックが生暖かい目を俺に向ける。

「昼間のアストルを見たら、ユウの奴、卒倒するんじゃないか？」

「だな。オレでもちよつと怖かったからな……」

「なんの、話？」

ユウは二人のヒソヒソ話に、不思議そうな目を見る。

あの時のことはそつとしておいてくれ。

俺だって、ほんの少しやりすぎたって反省してるんだ。



日の出と共に起きた俺達は、旧街道を南下して、太陽が中天を少し過ぎた頃にこの辺りでは比較的大きな農村であるメドナに到着した。

南沿岸部のポートアルムと学園都市ウェルスを結ぶ街道は二つあり、やや遠回りなこちらを使う行人人は比較的少ない。とはいえ、周辺で採れた野菜や麦をやり取りする際はこちらの街道を使うので、村には搬送用の馬車や馬が必ずあると、ユウは予想したのだ。

そしてその予想は正しく、ちょうどポートアルムへ作物を運ぶ馬車を見つけ、俺達は同乗させてもらうことになった。

当初は賢人の地位と金の力にものを言わせて馬か馬車を買い上げる予定だったが、最初からそちらに向かう用事があるのであれば、同乗させてもらった方が後腐れなくて済む。それに、奴らの目を少しは欺あやめる。